

研究課題名：エコポイント取引のプラットフォーム形成の研究

1. 初めに

本報告書にて、森基金を活用した研究過程の報告を行う。そこにおいて、まず研究内容が当初の「エコポイント取引のプラットフォーム形成の研究」から、インターンなどを経て関心領域が推移し、研究内容が変更したことを報告する。

2. 研究概要

研究テーマは「国内排出権の投資側面の評価分析～J-VER を例にして～」である。国内排出権は中小企業や自治体の環境対策への着手を促進させるために施行された、国内で取引される排出権制度の事である。本研究では環境省の制定する J-VER 制度を例にとり、J-VER 制度が林業の資金調達にどのように貢献したのか分析を行う。その結果から、国内企業への投資側面として国内排出権がどの程度機能したかを評価する。

3. 研究背景

京都議定書締約期間における日本の目標は温室効果ガス6%削減であるが、そのうちの3.9%に森林による二酸化炭素の吸収量を充てている。それだけでなく日本の国土70%は森林であり、治水や生物多様性など森林の持つ役割は大きい。

森林の保持のためには、人工林であれば間伐を、天然林であれば伐採や焼失などの管理対策を取らなければならない。その管理にかかる費用は大きく、コストの問題が日本の森林管理の命題として上がっている。

国有林であれば国の森林管理局が管理することになるが、保安林維持予算や営林署職員の削減など国の政策として万全の支援がされているとは言えないのが現状である。公有林は地方自治体が整備することになるが、自治体も現在費用が少なく森林の整備は負担となっている。

また私有林であれば更に自体は深刻である。安い外材の流入など、林業は木材を売ることで利益を得られない現状にある。しかし森林の間伐は維持のために必要であり、林野庁から補助金も出ているものの、間伐の三分の一は林業家が負担することになっている。そのため林業は現在逼迫した現状にある。

そんな日本の森林 2500 万ヘクタールのうち、58%が私有林であり日本の林業を活発化す

る政策として、国内排出権が新たな資金調達源になるのではないかと期待されている。**J-VER** 制度は国内で唯一、民間企業が森林経営における森林の CO2 吸収量の増大分を排出権として売買できる制度のことである。

4. 研究活動

- ・2010年9月～ 社団法人海外環境協力センターにてインターンシップを実施

インターンシップ先は**J-VER**の国内事務局であり、そこで**J-VER**を活用したカーボン・オフセット制度の推進局でインターンを行う。現在はアルバイトとして随時働いている。

ここでは**J-VER**、カーボン・オフセットの基礎知識を身につけると共に、企業へのヒアリングなどを行った。

- ・2010年10月～ 文献調査及び研究計画の作成

文献にて日本及び世界の林業経営の基礎を学ぶ。また研究室における発表でアドバイスを頂いた。

- ・2011年1月20日～21日 フィールドワーク

20日には大阪で開催されたカーボン・オフセット EXPO に参加、**J-VER**を販売している自治体（高知県、新潟県など）、企業（前田林業など）にヒアリングを行い、**J-VER**の価格設定などについてインタビューを行う。

また21日には京都市へ行き、バイオディーゼル燃料による清掃バスの運行状況及び住民の認識をインタビュー形式で調査。**J-VER**を活用する際において重要な部分になる、周辺住民の協力についての示唆を得た。

5. 今後の予定

フィールドワークにより、自治体よりも林業家の**J-VER**販売における不安が大きいことが分かった。自治体は公有林を整備しなければならない立場にあり、**J-VER**の販売の現状において大きな不満はないことが分かった。

しかし林業家は**J-VER**の販売によって、新たな事業を起こすなどの資金に充てたいと切実な現状にある。そこから**J-VER**販売はこういった中小企業の環境事業の促進に本当に貢献しているか、という問題意識を持って研究を進めていくことを決定した。

今後は**J-VER**を生み出す上で、補助金制度の調査や間伐などのコストを文献から調査を進める。それと共に**J-VER**の購買側の企業などにとってもどの程度メリットがあるかを調べ、今後の**J-VER**制度における投資が促進されやすい環境とは何かを追求していく。

またフィールドワークを行い、実際に間伐の現場を見学しに行く予定である。

6. 資金の使い方

森基金で頂いた資金は、主にフィールドワークと書籍代に当てさせていただいた。特に今まで借りていた資料を森基金で購入することが出来、非常に助かっている。またインターンの関係で聴くことが出来なかった講演に友人に代理参加してもらうなども出来た。

ここで感謝の意を述べさせていただくと共に、次年度もこれを受けて研究を進めていき成果を出したいと思う。